

## 不祥事根絶に向けて

令和5年3月17日  
千葉県教育庁  
教育振興部教職員課長

不祥事は特別な誰かが起こすものではなく、誰でも起こす可能性があります。あらゆる機会を通じて、不祥事根絶の取組をしています。それにもかかわらず、今年度の懲戒処分は、監督責任も含め32件であり、根絶には至っていません。

不祥事はひとたび起きれば、学校運営に多大なる影響を与えます。改めて、全ての教職員が、不祥事を他人事だと思わず、事の重大性を認識し、以下に示すこれまでの事案の「職員自身の反省の言葉」を自分自身に置きかえるなどして、当事者意識をさらに高め、そして不祥事根絶にかかる研修をより効果ある内容とするための参考の一つとして活用し、本日発出した「職員の綱紀の粛正について（通知）」に基づく対策を必ず実行してください。

### 職員自身の反省の言葉（これまでの複数事案からの抜粋です）

#### 1 「不祥事防止研修等を受講し、管理職からの指導も受けていた」にもかかわらず不祥事を起こしたことへの弁

- ・ 研修を受けているときは、不祥事は起こしてはならないということは考えていたと思う。しかし、実際の場面になったときに、それが頭に浮かんできたかという、そこで負けてしまった。
- ・ 事例を自分のこととして考えられなかった。これくらいはという感覚があった。
- ・ 意識が足らなかったから、今回のことが起こったと考えている。
- ・ 研修での事例を自分事として捉えられなかった。また、今回の事故とこれまで受けた研修を結びつけられなかった。
- ・ 心のどこかで、「自分は大丈夫であろう。」といった思いがあった。調子に乗っていたのだと思う。
- ・ いけないことだとわかっていたが、「自分だけは大丈夫。」であるといった自分でもわからない自信があった。「何とかばれないであろう。」といった思いがあった。
- ・ 研修は受けていた。懲戒処分の事例についても聞いていた。その時々考えはあったが、起こしたことに申し訳ないと言えない。

#### 2 教育職員であることからの弁

- ・ 私一人の起こした事だが、教員の身分や立場というものが、これだけ大きな責任を有して、影響力を持っていたのだということを再認識した。教えることができなくなる、生徒に会えなくなる、すべてを失ってしまった。過去に戻りたい気持ちである。
- ・ 多くの人に迷惑をかけてしまった。信頼されなければならない立場であるにもかかわらず、本当に申し訳ない。
- ・ 一生懸命に日々を過ごしている生徒たちに対して、ショックを与えることとなってしまう、申し訳ない気持ちで一杯である。